
快笑鬼は笑う

西前 公也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

快笑鬼は笑う

【Nコード】

N3378N

【作者名】

西前 公也

【あらすじ】

目の前で人が投身自殺を図ったら、大抵の人間は助けられるのなら助けるだろう。私、淡墨鈴理もそうした。けれど。

彼女、白風御雪は、生も死も笑い飛ばしてしまった……。

これは、そんな『快笑鬼』の物語。

そして、快笑鬼に振り回される『殺人鬼』の物語。

連続失踪事件。口裂けジャック。鮮血に染まる学校。

彼女と過ごした、奇妙な夏休み。

プロローグ

女の子が目の前で、投身自殺を図った。

私はダッシュで崖の縁に行き、そしてその娘の手首を掴まえる。
柔らかく、細い腕だった。

「むう……やっぱり助けちゃうか」

やれやれだぜ。そんな感じでその娘はため息をつく。その後、
「世の中まなりませんなあ。でも、だからおもしろいのかも。く
ししし」

「あなた、死にたいの？」

私はそう尋ねる。

「うーん。そうだなあ。……アナタとお喋りがしたいから、引き上
げてくれない？」

分かった、と言って私は彼女を引っ張る。女だてらに力には自信
があるが、さすがに落ちかけた彼女自身の手助けを借りて、四苦八
苦しながら、なんとか地面にあげることができた。

そして、再び、彼女に尋ねる。

「どうして、あんなことをしたの？」

彼女は一瞬、悩む表情を見せた。それはまるで当たり前前のことを
聞かれ、戸惑っているような。

「さいですなあ……くししし」

彼女は、笑いながら答える。

「アナタが人を殺しているのを見たから……かな？」

彼方にある街の灯が、ぼんやりと森と崖の狭間を照らしている。

月がその光と競合するかのようになり、蒼い世界を作ろうとしている。夜は完全な暗闇を手に入れられず、淡い風がその悔し泣きの音として、森の木々のざわめきを起こす。

私と彼女、この山にはたぶんいま、この二人しかいない。

「な……なんのことよ」

「ふっふっふ、ダンナ、あつしの目は誤魔化せませんぜ。家政婦は見た！ 見ちゃった！」

「あ、あなたふざけないで！」

「いやーほんと一瞬だったね。一刺しで死亡！ 惚れ惚れするよ！ あんな小説みたいなのホントにあるんだ！」

ひしっ、と私の手が彼女に握られた。

「ふふふん」

そのまま私と一緒にその場で周り始めた。楽しそうに愉快そうに無邪気な子供みたいなスキップで。

「ちょ、ちょ、ちょっと！ だから！」

「っていうかさ」

私の手を離すと、一直線に近くにある大きな木の下へと走り出す。迷いは、無い。

……隠すことは、もう無理か。

「ここにあるじゃん」

びしっ、と指が指される。

私としては、埋める前に少し隠していたつもりだったのだ。だから少し注意すれば、それは見つかる。

人の目に触れる。

「死体」

月の光は優しい光だ。死体となった来良らいらを隠すように守るように、包んでくれる。ありがたい。私はなんだか自然に感謝したくなった。今の来良は、ちよっとグロテクスだ。

「ふふふん どうだねワトソンくん」

唇の端を吊り上げ、得意そうに彼女は笑う。なんかムカつく。

「あー、もう……。わかったわよ」

深く深く、ためいき。ためいきしかでない。

「そうよ。私とその女の子を殺したのよ」

「うむ！ わかればよろしい！ くしししし」

彼女はまた、くししし、と笑い始めた。

まったく……。私は彼女を見つめた。

まるで小動物みたいな娘だ。背は私より頭一つ小さい。いや、私が普通の女子より背が高いから、これで普通なのか？ いや、それでも小さいという印象を受ける。さつきからちよこまかと動いているから、高校生くらいの歳だと思うのに、まるで幼稚園児みたいなイメージを想起する。要するに、幼稚なのだ。そんな子供ぽさがあるとか歳相応の背の高さでカバーされ、幼稚園児というよりまだ動物特有の落ち着きがあると判断出来る

髪にも特徴がある。染めたのかわからないが、前髪の房の一部が白くなっているのだ。目の幅くらいだろうか、そんな大きさである。服は夏らしい薄めのＴシャツに、ひざまでのスカート。夏らしいが、山の中には不釣り合いだ。

私は彼女を、見つめ続ける。見つめ続ける。

「うん……。？ 何なの？ さつきからじー、私のことを見て？」

なんだか彼女のペースにはまってしまい、『やるべきこと』を失念しかけたが……。私にはやることがある。

「わからないのあなた……。？ さつきからバカみたいなふりをして本当は怖いんじゃない？」

ようやく、こちらも落ち着きを取り戻す。私は凄みを効かせながら……

……微笑んだ。

「見つめてるのよ。これから殺す相手を」

「……チガウ。チガウ。」

胸の中でナニ力が動いた。

分かっている。分かっているわよ。

これは、私が殺したい相手ではない。

けれど、けれど――。

「見られたからには、殺すしかない」

静かな夜の空間に突き刺すように、私は宣言する。

森のざわめきが大きくなった。

街の灯は遠い。

ここは森の奥。

彼女は赤ずきんで、私は腹を空かしたオオカミだ。

彼女の世界は、オシマイになる――。

「くししし。ねえ」

――それなのに。もうすぐ死ぬのに。

それでも彼女は。

笑っていた。

まるで笑うことが、自らの生き様であるように。

「さっき言っていたよね。『どうして、あんなことをしたの』って。自殺の理由、教えてあげるよ」

一歩、また一歩。彼女は近づいてきた。なんだろう。なんなのだろう。

なんだか彼女が、怖く見える。畏く、見える。

「――」

すぐ目の前まできたとき、彼女は言った。

「退屈、だったから」

「退屈……だった？」

「あ、勘違いしないように言っておくと、別に、こんな世界はつまらない！　なんて思っているわけじゃないよ世界はおもしろい、これ以上なくおもしろいよ。人が生きて喜んで悲しんで笑って怒って泣いて、最後に死んでいく、最高に楽しいモノだよ」

勘違いしちゃ駄目、そう念を押すようにつけたした。

「でも、わたしって欲張りなんだ。次から次へと楽しさを要求しちゃう。もっともっと、もっともっとと頂戴！」

彼女は星がまばらに輝く夜空に、懇願するかのように両手をのば

す。手のひらで何かを掴もうとする。けれど、何も手に入らず――。

「わたし、需要と供給のバランスをくずしちゃったんだと思う」

「だからって……死のうとする？ 要するに楽しいことをあらかたやりつくして、みんな飽きちゃったってことでしょ」

なぜだろう。私は思わず、そんな言葉を口から出した。

「そんなもの、大抵のものは時間を置けばまた興味を持つと思うわ」
「……そうだね。きつとそう。でも、駄目なんだ。ちよつと退屈が――ひどい」

そう言つて彼女は下を向いた。私と彼女の位置はほんのちよつとまで迫つていた。

そうそれは、彼女の肩に手をおけるくらい――。

「ねえ！」

「うわあ！」

「次はそつちの番だよ！」

なんか一瞬、彼女の肩に手をおこうとしたような……いやそれより、なんだ？ 次？

「私が話をしたんだから、次はそつちの番だよ！ ささ、どうぞ――！」

「ふ、ふざけないで！ 番も何もないでしょ！ だいたい、本当にそれが理由なの、あなた？」

「うわゝ、へこむわゝ、一世一代の告白だったのに」

口をとがらせ、やれやれだぜ、と疲れた顔で彼女は言う。

こ、こいつ……！

「だから！ ふざけないでよ！」

「私としてはふざけてないんだけどな。あれが理由だよん。だいたいちゃんとした告白ってなんなの？ 手本見せてよ、ほら！ なんて殺したどうして殺したなぜ殺した！」

「うわ！」

近くにあつた枝が口の前にさし出された。なんだ、マイクの代わ

りか？

「さあさあさあさあさあ」

あ、いた、痛い痛い！ 枝の先が当たる口に！ これ地味に痛いわ！ 枝が妙に尖っている！

「わ、わかった！ 分かったから！」

「分ければよろしい」

……えっと。私、人を殺したのよね？ それで目撃者を消そうとしたのよね？ なんでこんなことをしているの？ そう思うと、なんだか眩暈がする。

「ああもう……私がなんでこの女の子を殺したかと言うと」

来良、ごめんね。なんだかあなたを無視して無邪気に遊んでいるみたいだったわ。

「それは」

「それは？」

なんだか楽しそうね。でも、たいした理由ではないわ。本当に、くだらない理由……。――」

「私は、殺人鬼なのよ」

「……え？」

「どう、おもしろくないでしょ？」

「いや、え？ 殺人鬼って」

ここにきて初めて、彼女は目を見開いて驚いた。死体をみたときでさえ、笑っていた彼女が。なんだか、やっと見返すことができたみたいで嬉しい。

「勘違いしないでね？ 通り魔みたくいのではないわ」

彼女の真似をする余裕も得れた。

「無差別に人は殺さない。いいえ、殺したくないわ。自分のなかでそう決めているの。」

この女の子はね、私と同じ学校の同級生なんだけど、いじめの加

害者だったの」

「ふむ、いじめの加害者。いじめダメ、ゼツタイ。悪い子なんだね」
「そう、悪い子。悪い子なの」

来良がしてきたことが頭をよぎる。

オレンジの夕日に照らされた教室で彼女は――。

「すごく悪い子なの。すごくすごく悪い子なの。だから」

――じゅるり。

「おう！？ 舌なめずり！？」
殺した。一瞬で。

「悪い人間だけを殺す。ルールでもあるし、嗜好でもあるの。悪い人間を見つけて、それがたまたま周期にあっていたら……」

「周期……？」

「今まで、この女の子を含めて4人殺してきたわ。みんな殺したいっていう周期にのつとつて……」

一瞬で、殺してきた」

4人殺した。それは確か、確実に死刑になる人数。そして私はこれからも、人を殺していく――。

「殺人鬼……なんだね」

「ええ、殺人鬼よ」

彼女はうつむいた。

そして、わなわなと震えだした。

「やっと、震えるのね……。さて、それではお遊びもおしまい。今度こそ死んでもらう……！」

彼女は何も悪くない。少しアタマが変みただけど、それでも善良な一般人だ。

それでも。私はまだ生きていたいから。悪鬼羅刹だけど生きていたいから。

『彼』にもまだ出会っていないから――！！

「すごい……！」

「はい？」

……あれ？ 彼女、今なんて言った？

「すごいって言いましたああああああ！」

きゃああああああ！？」

彼女は私に向かって飛び掛ってきた！？

「ねえねえ！ メルアド交換しない！？ 住所も教えるよ！ いいでしょ！？」

はああああ！？」

「ちよつと！ 私は今、あなたを殺そうとしているのよ？ なにを……」

「いえいえ！ ちよつと考えてみて！ 住所さえ渡していればいつでも私の家を探せるよ？ だったら脅迫材料なるよね？」

何か紙ない？ 彼女はそう尋ねると、私が腰につけていたポシェットを無理やりあけ、中にあったメモ用紙とペンを取り出した。そしてスラスラとペンで、漢字と数字を書いていった。

「はい！」

満面の笑みで、住所を私に押し付けた。

「脅迫材料だよ！」

……違つ。ゼツタイに脅迫材料つてものは、こんな満面の笑みで渡すものではない……！

……怒っていいよね？ もう怒っていいよね……！？

「あ、そうだ！」

「今度は……なに？」

眉間をぴくぴくさせながら、そう尋ねる。

「この女の子、埋めなくちゃいけないんじゃないの？」

「え、ええ。そうね」

もちろん殺した後のことを考えて、場所を裏山にしたのだ。

ここなら、埋める場所はいくらでもある。

「手伝う！」

「はい！？」

そう言つと、私をせかしながら、スコップのある場所まで連れて

行かせた。

実に楽しそうに掘っていた。一言でいうならそうだろうか。

実際の話、私はこの時点でかなり疲れてしまっていた。

なんというかもう、私、勢いに弱すぎね？ である。

来良を埋め終わり、一休みとばかりにそこら辺の石に腰をおろした。

「　　」

隣からは鼻歌がリズムよく聞こえ、隣人の上機嫌が丸わかりだ。別に機嫌なんて知りたくも無いのに。

「楽しいな」

「……私も狂っているけど、あんたは桁が違うわね……」

「お褒めにあずかり光栄です！」

「もう……」

疲れた……。

「さてと！ それじゃ帰りますか」

「……目撃者は殺す。そうしなくちゃいけないんだけど……」

なんていうか……毒気が抜かれたわね、あんたには。

「あんた、しゃべらない？」

「しゃべらないよ！ こんな楽しいこと！」

朗らかに、無邪気に。少女は笑う。

こんなに狂っているのに。こんなにも最悪なのに。

「それでも、楽しいっていうのね」

「うん。本当に……楽しいよ。ねえ、アナタ名前は？」

「……もう全部言っちゃうわ。あわすみすり淡墨鈴理よ」

「ワタシは、しろなぎみゆき白凧御雪。よろしくね！」

少女がその身を投げてから、一時間も経っていない。経っていない

いのに、彼女は、白凧御雪は、また、私の手を握った。まるで、それは――

「友達になろう!」

また、眩暈がした。

まるで、不確かなユメのような――

「じゃあね!」

彼女が去っていく姿を半ば呆然と見送る。

大丈夫だぶん、あんなおかしな女の言葉誰が信じるものか。そう思っではいるのだが……。

なんだろう、すごくイヤな予感がする――

「白凧御雪といます! こんな時期からですが、それでもみなさんと過ごす時間が…… すごくすごく、楽しみです!」

私の教室にあの満面の笑みがこぼれた。

転校生? はい?

――これが淡墨鈴理という殺人鬼と、白凧御雪という快笑鬼との、狂気と喜劇に満ちたファーストコンタクトなのであった。

第一章 七不思議？

高校生になって始めての期末テストが終わり、教室の中がようやく明るくなったようだ。期間中は本当にみんな、不安と疲労に押しつぶされそうになっていた。かく言う私、淡墨鈴理もそうで、ただひたすら、この苦行が終了するのを、指折り待ち続けていたのだ。

七月十一日、テストの採点のための休みが過ぎ、私は学校へ行った。教室に入り、テストの結果への不安と、それ以上にこれから始まる高校生活初の夏休みへの期待に満ちた空気のなかへと混じっていく。

らしくもないが、結構夏休みへの期待を持っている自分に、驚いた。

「ずいぶんとウキウキしているわね、鈴も」

クラスメートの久美もそんな私の様子を見透かし、そんなことを言ってきた。私の隣の空席に座る。

「いや、別に……ウキウキっていうほどでもないわ」

「へえ、そうかな。鈴って結構、思っていることが態度にしやすいからなあ」

ショートカットにまとめた髪をかきあげ、その後メガネを上げ下げする久美。

「だから、からかわないでよ……」

「はは、ごめんごめん」

今年の四月、この県立黒津くろつ高校に入学したところからの友人である彼女だが、なんだか大人っぽい娘だ。いつもなんとなく私は子供あつかいされているような気がして、それがイライラする。

まあ、根はいい娘なんだけど。落ち着きがあつて、その理知的な瞳は周りの人間を引き寄せる。人付き合いも良く、この学校の情報を早くも大量に保持していて、それから……。

「ほら、またぼー、としている！」

ぐぎ！

「げふっ！？」

顔の両側面を手のひらで包まれ、そのまま首を後ろに曲げられた。何か変な音がして、教室の電灯が見えた。

「い、いたい……」

「人の話はちゃんと聞かなくちゃね」

……それから私限定の悪戯娘だ。

周りですくすと笑い声がこぼれている。恥ずかしいなあ、もう。

「ねえ、鈴。そういえばテストのことなんだけど……」

……悪戯娘か。

私はその言葉でふと、昨日の彼女を思い出した。

「ああ久美、それなら」

久美とテストの事とか夏休みの事などを話しながら、もう一方の心の中で、昨日の出来事を反芻する。

あの蒼い夜。暗がりのなかで。

来良の死にざま……

みんなでプールにいこう。そう口に出している私の薄皮一枚向こうでは、人を殺したという重く不気味で、しかし得体の知れない愉悦がじわじわと広がっていく。注意しなければ、それがこちら側に浸透してしまいそうだ。

……ああ、あれは楽しかった。

……楽しかった、か。

楽しい楽しいを連呼する女の子だった。白風御雪は。私の殺人を目撃した少女。あのまま逃がしてしまったけれど、大丈夫だろうか？ 警察へと一直線、が妥当な線だと思う。ほぼ一方的に住所を書いて押し付けてきたが、そんなもの、すぐに警察に保護されてしまえば問題ない。

相当抜かってしまったに違いないのだ。致命的な失敗である。だが、しかし。

あの娘が通報するはずないとも思う自分もいる。なぜかは分から

ない。なぜかは――。

「そういえば転校生が」

「え？」

久美が何かを言いかけたとき、チャイムの音が響いた。そしてそれと同じタイミングで、我らが男性教諭、担任の田中先生が入ってきた。

「よし、みんな座れー」

守口君が「先生絶対廊下でタイミング計ってる」と言うのが聞こえた。クラスみんなが席に座り始める。

……あの娘のことはとりあえず今朝は大丈夫だ。家の前にパトカーは停まっていらない。すぐ通報したわけではないようだ。今日あたり、書かれた住所の所に行ってみるか。

「ねえ。今日転校生がくるらしいよ？」

「ちよっ……」

久美はそう言うところそくさと自分の席へと戻っていった。はい？
転校生？

今は七月の十一日なのに？ 一学期ももうすぐ終わるのに。っていうか後二日だし。テストの返却日である今日と、終業式のある明日、それでおしまいだ。後は長い夏休みが続く。それだったら二期から来たほうがいいのではないか。なにをそんなに急いでいるのだろう。

少し肥えて頭がつるつるに禿げ上がった、だが人のよさそうな柔らかい瞳が特徴の田中先生、先生の話に耳を傾ける。

「あー、みんな。みんなちよつと驚くかもしれないが……。今日からクラスに新しい仲間が増えるぞ」

――え、え？

35人（私と久美以外）の空気が、微妙なものへと変わっていく。そりゃ、戸惑うわ。

――な、なんだってー！

――なんでこの時期？

――俺、絶対紹介されても二学期には忘れてる。

――いや、ある意味忘れないかも。

――男でも女でもどんとこい。

「よし、じゃあ入って来い」

私達へのフオローは入れず、先生はいきなり、その転校生を招き
いれた。先生、勢いで乗り切るつもりだな。教室の視線が、扉へと
集中する。

がらがら、と扉が開いた。

楽しくて、楽しくて、仕方が無いという笑み――。

「……はい？」

白い髪の方が顔にかかる。小動物のような所作。それは小柄とい
う印象を受ける女子。

「ちょ、ちよつと！」

私は思わず、席から立ち上がった。

「どうした、淡墨？」

先生と、クラスみんなが怪訝な目で見つめる。だが、どうして
も、立たざるを得なかった。驚かざるを得なかった。
だって。

「あー、淡墨は座るように。ええと、転校生の……」

先生がチョークで黒板に名前を書いていく。

白風御雪。

私は頭が真っ白になった。

「ねえねえ、なんでこの時期に転校してきたの!？」「東北地方か
らきたらしいけど、なまりはあんまないね」「やべえ、声かけてえ

！ あっ、もう声かけてる！ てへっ！」「キモいだよ、キミは。結婚してください！」「い、いきなりすぎるんだな。は、はやすぎるんだな。あの……て、手を握っていい、のかな？ はあはあ」「死ね（ぼそっ）。ねえ、ねえ。この髪の毛の白いとこ染めているの？ すごく綺麗だな。」「趣味は？」「この学校、家から遠くない？」「おいしいアイスクリームのお店、知ってるんだ。今度食べにこうよ！」「ちょ、ちょっとデッサンだけ！ デッサンだけ描かせて！ あ、いや変なことには使わない！ 使わないったら！ 妄想用じゃないよ！」「かわいい！ リスみたいだね白凧さん！」

転校の事とか、髪の毛の白い事とか、本人からしてみれば気にしているかもしれないことも、聞いているのだけど、クラスみんなにはたぶん悪気はない。でもちよつと先走りすぎかな？ アイスクリームの店について言っているのは久美、あそこおいしいんだよね。」「声かけてえ！」からの三人はクラスの三馬鹿三銃士。リシュリーに殺されしまえ。デッサンがうんぬんの娘は……考えたくない。ホームルーム後。白凧は教室中からの質問責めにあっていた。

「ほらほら、鈴もなんか質問しなよ！」

「……」

いまだに頭は真っ白だった。自己紹介のとき、彼女がなにを言っていたのかすら思い出せない。

え、なに？ どうして彼女がここにいるの？ 転校して、私と同じクラス？

パニックになってしまつて、もうどうしようもない。

「……はあ。しかも」

さっきから白凧に対する質問がやけにはつきりと聞こえてくる。一字一句間違えず覚えさせられる音量だ。なぜなら。

「せつかく隣の席になつたんだから！」

「久美。私泣いていい？」

泣かしてくれい馬鹿野郎。そんな演歌が聞こえてくるよ。

白凧は私の席の隣にあつた空席に座つた。ちなみに、窓側の一番

後ろの席が私の席。

びし！

そんな音が聞こえそうなくらい、白凧が手を上げた。

「よっしゃ！ それじゃ一斉に答えましょうか！」

一斉？ みんながきょとん、となった。

「この時期に転校してきた理由は、さっきも言ったけど、みんなと早くなかよくなりたかったから！ どんな人がいるのかなあ、って楽しみでしようがなかったもの！ それに二学期から転入だと、こっちに引越してくる準備やなんやらで夏休みを棒にふるでしょ、もつたいない！」

確かに東方は秋田から来たんだけど、小さいころは関東に住んでいて、引越しはこれで二度目なんだ。なまりは、うーん、あんまりないね。

どんな声かけてよ！ これからもよろしくっ！

結婚は今のところ考えていないです、ごめんなさい！ でも追いかけてくれたら振り向くかも。なんてね！

握手？ してあげるよー、はい！ うん？ なんか汗がびっしょりだね？

趣味はなんでも！ 多趣味の権化！ どんな話題でもついていけるよ！

家は近いよ！ 歩いて十分くらいかな？

アイスクリーム！？ いくいくー！

デッサン？ モデルならいくらでもなるけど？

リス？ 私はげっ歯類じゃありません！ でもかわいいって言うてくれて……」

そこでうつむく。ためて、ためて。そして。

「ありがとー！」

それは喜びの濁流だった。言葉の一つ一つに歓喜が満ち満ち、全てを祝福するかのように、高らかに奏でられる。なんだか、こっちまで、心が躍るようなー……。

「す、すげー！」

男子の一人がそういった。

「え、質問全部覚えてたの？」

「みんな一氣にいつちゃたから普通混乱するよね？」

「あんた聖徳太子か！？」

「あれ？ わたしの質問は？」

白凧の白い髪の方について質問した、ちょっと派手ぎみの髪を茶に染めた女子がそう言った。名前は……確か月形さん？ いや、一個ぐらい飛ばすことも……。

「ああ、それなら、あの娘のほうが綺麗じゃん」
指が指された。

私に指された。

「わ、私？」

あーそういえば、という声が広まる。久美もなんだかうなづいてる。

「ちょ、ちょっと……」

「この髪は染めたもんじゃなくて、遺伝なんだよね。一部だけ、この髪の前の方の、この房だけ白くなるの。まあ、それは置いて、すぐきれいだよ。薄く輝いてるみたいにみえるし、腰まで届いて、優雅な感じがする」

それは、私にたいしての言葉、なのか？ なにを……。

「顔もいいねえ。目は鋭いというより端麗っていうほうがいいし、細めの顔の形がかつこよさを引き立たせているね。イメージは……女剣士！」

なるほどー！ みんな一斉にそうハモる。なんでだ。どういうことだ？ このクラスはちょっと前までこんなテンションじゃなかった。こんなに仲よかったか？

「ねえ、みんな！ 今日の放課、学校の案内をしてくれない？」

いいともー！ その叫び声とともに作戦会議。ここがいい、ここはダメ。みんな白凧と私をおいて離れたところに集まっていったし

まった。

呆然。

もう、そうするしかないだろう。再び、頭の中が真っ白になってしまった。

すると、白凧が私に近づいてきた。

「ねえ」

上機嫌に鼻歌を歌いながら。

目の前に近づく。

それは、昨日と同じ近さだった。

「……なに？」

「やっぱりこの高校だったね？」

「さて、どこを案内しようか？ うん、どうした衣里？」

「あのさ久美、アレについては言う？」

「もちろん。今この学校で一番ホットな話題じゃない」

「そうよね。白凧さん、興味を持ってくれるわよね」

この学校の七不思議について。

？

「やっぱりこの高校だったね？」

白凧は周りには聞こえない、しかし私にははっきりと聞こえる声でそう言い放った。

「やっぱり飼育小屋は外せないでしょー！」

みんな案内場所の選定で、こっちには目もくれていない。

アブラゼミの鳴き声が聞こえてくる。今年もあの大合唱が聞けるのかー。

「……どういうこと？」

「いやさ、アナタが黒津高校の生徒なんだって、なんとなく分かっていたから」

「！ どうして!？」

「いや、どうしてって……うん、そうだな。あの女の子の死体の様子を思い出してみよう!」

ザ・クイズ！ と人さし指をピンとあげ、白凧は出題してきた。

「死体の様子……？」

来良の死に様は、それは私が殺したのだから、よくおぼえているけど……。

彼女は仰向けに倒れ、それまでの美しい顔立ちが想像できないほど醜く歪んだグロテスクな表情をしていた。手提げのバッグを持っ
ていて、あとは――学校の制服を着ていた。

「そうそこ!」

そこ？

「あの日、あの夜、アナタなんて言ってた？」

「え？」

「わたしの記憶が正しければ、『この娘は私と同級生』って」

「……あ」

そういえば、言っていたような気がする。この高校の制服をきた

来良を同級生と。……抜かった。

「く、くそ……！」

あ、あの時は目の前にいるこいつのせいでペースを狂わされてしまった、それで、だから！

「これでアナタはわたしの監視が出来るね」

「う……」

監視。そうだしつきは白凧の住所へ放課後行くと、決めていた。はじめて、人を殺すところを目撃された。顔まで見られた。名前まで知られた。それは一回でも起きれば、すべてがオシマイになってしまう、そんな危険を持っている。

「あなた……なにが目的なの？」

私は白凧に尋ねる。白凧はなんだか、困ったような表情を浮かべた。まるでこれからちよつと照れるようなことでも言うような、そんな感じで。

「この学校にきたのは偶然だよ。それ以外の何者でもないよ。でも、こうして会えた。だから、アナタと一緒にいたい。だって今、わたしの目の前にいるのは」

わたしがはじめて出会った殺人鬼なんだもの。

「……」

私は、なにかを言おうと口を―――。

「二人とも何を話してるの？」

ぐざい！

「ぐおおお！」

また天井の電灯が見えたあ！ 首が後ろにやられる。

「久美い！」

「鈴も放課後、白凧さんの学校案内参加する？」

日頃はもっと落ち着いているはずなのに、久美のテンションは上げ調子、本当に楽しそうに笑っていた。

「いまみんなで話し合っただけど、放課後あんまり大勢でいくのもなんか変だになってしまったの」

「って最初は全員で行くつもりだったの？ 15人はいたぞ？」

「ワタシが代表になって白凧さんを御案内。で、どうする？」

御案内ってー！ーそれは。はつきりいつていま白凧と一緒にいるのはかなり気まずい。私はまだ、かなり混乱しているのだ。この場からにげだしてしまいたい。そうとすら思っている。だから。

「遠慮」一緒にいこう！」

白凧が私の台詞にかぶせてきた。

「指名が入ったね」

久美がニヤリと笑った。

県立黒津高校について一言述べよ、ともし仮に言われたら、少しだけ古い学校だ、というあまり色気のない答えが返ってくることになると思う。黒津市に80年ほど前から場所を変えずに有り続け、市内の中には大勢の黒津高校卒業生がいる。

普通の高校だ。自慢できる部活動も出身有名人も挙げることは出来ない。これといって紹介できるものもない。それなのに。

「久美ちゃんの苗字は林原ね。うんうん、おぼえたよ」

「さっきの御雪の記憶力には驚いちゃったよ。あ、それであそこが体育館ね」

「ほうほう。わたしが前に行っていた学校と比べるとちょっと大きいかな？ うんうん！」

白凧は体育館一つで楽しそうだった。

楽しそうにしている演技、というわけでもないらしい。一挙一動が自然なのだ。人は嘘をつくとき、必ずどこかが、不自然になる。例えば目が泳ぐ。例えばそれまで動かしてもいなかった指を動かす。

ひと目で分かる。だが、白凧にはそれが見られない。常時自然体、怪しさのかけらもない。だが、それゆえに、そこが怪しいともいえるのだが。

それにしても、また勢いだ。白凧と久美の勢いに押されて、結局私は放課後の学校案内に駆り出されることになってしまった。

もちろん、白凧のとなりでこの学校をおもしろおかしくご説明！なんてことはパスさせてもらった。もう一度言うが私は相当に混乱しているのだ。説明は久美に任せて、久美と白凧、この二人の少し後ろを歩いている。テストの返却は昼までに終わり、今は1時30分。運動場からはもうすぐ始まる地区大会にむけて、練習のラストパートに入った野球部員たちの掛け声が響く。さっきまで学校内にあふれていた喧騒は生徒が帰宅していくにつれて下がり、今はただ、いっちにさんし！ という声が学校の音響の主役に抜擢されているのだ。

日差しは照りつけ、突き刺さる――！。

「次は、そうだな。じゃあ部室棟に行こうか」

「部室棟？ なにそれ久美ちゃん？」

「文化系の部活の部室が集まっているところだよ。確かこの学校の創立当初からの建物で……あ、にやり。おもしろい構造だよ」

「おお！ 顔を近づけてきたね！ おもしろい？ なら、いくしかないでしょー！」

二人はそこで高々とハイタッチをした。あつという間に仲良くなったしまった。なんかもう名前で呼び合っているし……。

「なんか疲れた……」

理解を遥かに超えた展開にずしつ、と疲労感が肩と心にのしかかるのであった。

部室棟は黒津高校の端っこにでんと無駄に敷地を持っている建物だ。瓦葺きで、神社みたいな建築であり、もともとはこの街の集会場だったらしい。それを高校が出来るときに接收し、いろいろな諸用途に使ってきたのだ。

ちなみに。

「鈴は文芸部だからここには足繁く通っているのよね」

「へへ、そうなんだ」

「いや、確かに文芸部には所属しているわ。でも足繁くってほどでは……」

「鈴は幽霊部員だからね」

私達の教室、1-3がある中央棟から渡り廊下を通り、少し歩くと部室棟が見えてきた。白凧は「おお」なんてここでも驚いていたけど、確かに始めて見た人間にはちょっと驚く大きさだろう。なにせ体育館と同じくらい大きいからだ。

木造の玄関に着くと、靴はまばらにしかなく、あまり人がいないことを示している。

「うん？ 靴を脱ぐの？」

「そう。ほら」

玄関の扉をくぐるともう一つ、今度はくもりガラスで出来た両開きのドアがある。久美はこれを押しかいた。

「へえ〜！」

またまた感嘆の声が白凧からもれた。

そこは広い畳敷きの空間。二階三階などの階はなく、さつきも言ったが体育館のような構造だ（ご丁寧に一番前には舞台まである）。

白凧はあたりを見回して、言った。

「ふむふむ、各部は板塀で仕切っていると」

そのとおりで、これらは持ち運び可能だ。まあ、この学校で部室棟が一番変わった建物だ。ある意味黒津高校も特徴のある学校なのかもしれない。

「でも、ちょっと蒸し暑いねえ〜」

それもそのとおり。ここにはクーラーがついていない。まあ、換気はいいから無茶苦茶、というわけでもないが。

「はあ〜すごい」

白凧はキラキラとした目でそんなことを言う。この変わった空間

を思う存分感じてやろう。そんな雰囲気だ。

……そういえばさつきこいつ、私のことをきれいだとかなんとか……。あれはなんだ、おせじか？ まあ社交辞令に決まっているが、妙に恥ずかしさを感じてしまった。さらにそう感じることで自分で自分がきれいなんだと思っているのか？ というもし事実ならこれ以上もなくイタいぞ自分、という考えに至り顔が熱くなる。

なんなんだ、こいつ。

じつ、と見つめる。

あの白い房は私から見て白風が後ろを見ているため見えない。髪は肩までかかるくらい。深い、黒色。印象的なほど深い、黒色。あの白色とはギャップがかなりある。

深い、黒色――。

「おい変態」

「きやあ!？」

いきなり後ろから声が聞こえた。驚いて思わず飛び上がる。

「淡墨、なに人の髪をじろじろ見てんだよお前。今のお前の表情なんか獲物を狙うハイエナみたいだったぞ？」

それは見知った人だった。

「……ハイエナの目なんて見たことあるんですか？ 島田先輩」

「あれ、島田先輩？ まだ帰ってなかったんですか？」

「よお、久美。お前らどうした？」

島田先輩は文芸部のスペースへと戻り、そこで麦茶をコップに入れ飲み始めた。机にはお弁当が広げられている。

島田秋彦先輩。二年生で文芸部の部長だ。髪を立たせ、タカのように鋭い目を持ったその風貌は、攻撃的ともいえる。だが怖いというわけでもなく、なんとかメガネが知的というオブラートに包んでいてくれる。

「もうすぐ2時だぞ。ハラ減ってないか？」

「そうですね。もうすぐ帰ります。だいたい案内も済みましたし」

「案内、その娘のか？」

島田先輩は白凧のほうを見る。

「はい。今日転校してきた白凧御雪です！」

元気よく手をあげた。

「はっは。おもしろい娘だなあ。今日転校してきたのか？」

それからしばらく、私達は白凧を先輩に紹介した。先輩はかなり白凧に興味を持ち、また話をしてくれと言った。それから、

「ちよつと淡墨は残ってくれ」

「え、なんですか？」

「まあ幽霊部員にたいする説教、かな」

「はは、そりゃ一回お灸をすえなくちゃね。御雪のことは任せとい
て」

いったいなんだろうか。首をひねる。私はお弁当を持ってきているので（昨日のうちに一度、放課後部室に行こうと思っていたのだ）ここで、ご案内からは離脱することになった。後の二人はどこかに食べにいくらしい。

久美は白凧を連れ、部室棟の玄関へと向かう。ああ、ようやくあいつから離れられた。一旦心の整理整頓時間がほしい。あいつが殺人のことをしゃべるといふ不安はあるが、それでも休憩させてくれ。二人が玄関を出ようとする。

その時、

「またね、鈴ちゃん！」

部室棟全体に響き渡るような、はつらつとした――。

「あ、う、うん。また……」

……いきなり、ちゃんづけはよしてくれ……。

「はは、本当におもしろいなあいつ」

「恥ずかしいだけですよ……」

二人が帰ったあと、私は先輩と一緒に弁当を食べていた。湿気があり、汗がにじむが、ここで食べられないこともない。

「それで、あのなんでしょうか？」

「むう。説教か、めんどくさい」

て、適当な人だなあ。

「あ、そうだ」

先輩はこれといってなんでもなく、気軽に言った。

「なあ、お前も一応女子だろう」

「一応って先輩」

「なあ、口裂けジャックって知ってるか？」

?

11歳の時、初めて人を殺した。

担任の先生に文句ばかりを言う、あるクラスメートの母親がいた。もつと我が子を正當に評価しろ。この子につらいことをさせるな。ことあるごとに電話で抗議し、先生はあつという間にノイローゼになつてしまった。

私がそれを知ったのは、クラスのプリントを職員室に持っていたときたまたま、先生が愚痴を言っていたのを盗み聞きたから。「くそっ、あいつ……あいつ……死ねばいいのに」

いつも優しい先生がそんなことを言うことに驚いて、それ以上に先生にそんなことをいわせる奴に憤慨した。私は先生を尊敬していた。先生のために何かが出来ないか、考えた。

――蒼い月の夜。夏の熱が残つてる。

私はあいつを尾行した。お母さんとお父さんには内緒。真夜中に家を飛び出して、あいつの夜遊びを尾行した。

あいつは外で男を作っていた。なんて悪い奴。なんて悪い奴。なんて、悪い奴。

街の盛り場に行くためには、住宅街からだ和林を通るのが近い。真夜中、周りには誰もいない。あの時には分からなかったけど、あいつは男を求める獣の目をしていた。

[illegible]

惡。

頭が何かに一杯になって、そして自然に体が動いた。

まばたきをするように自然だった。

「口裂けジャック？」

先輩は、どうだ？ とばかりに首を軽く傾けながら、私の答えを待っている。

だが、それは聞き覚えのない言葉だった。

「聞いたこと、ありません。だいたい、なんですかそれ？」

「いや、俺も詳しくは知らないんだけど……」

ぼりぼりと、先輩は頭をかいた。いつもの先輩らしくない。なんだが、口ごもっている。

「七不思議、らしいんだな」

「七不思議？」

七不思議、ってあの七不思議だろうか？

学校の中で語られる、不思議な怪異。

夜歩く二宮尊徳の銅像、独りでに鳴る音楽室のピアノ、同じく音楽室の笑うベートーベン、後は十二段だと思っていたら実は十三段あった階段……。あつた階段……。

「そう、その七不思議だ。口裂けジャックっていうのもこの学校に古くから伝わるその一つ……らしい」

詳しくは知らないんだけどな。もう一度、さっきと同じことを言い、先輩は私のことをみつめた。

「女子の間で流行っているらしいんだが」

「……む」

お前も一応女子だろ？ ああ、そうですよ知りませんでした！

「うん？ あはは、自分は知らないからって拗ねているんだな？」

「そんなこと、ありません」

「いや、よく分かるよ。お前はわかりやすいんだから」

おかしそうに笑う先輩。ああ、もう。

むしゃくしゃして、一気に弁当をかきこんだ。

「おいおい、そんなんじゃノドにつまるぞ？ まあ、その口裂けジヤックっていうのは殺人鬼なんだな」

「……さっじんき。」

なんとなく、ジャックというネーミングからそうじゃないかなという推測はあった。

「なんでもマッドな科学者の実験に巻き込まれ、口が裂けてしまった男が恐ろしい狂気に憑かれてしまった。男はこの街の人間に的をしぼって殺人を繰り返しているという……。ストーリーはこんな感じだ」

「……変な話ですね。その人どうしてこの街の人間だけを殺しているんですか？ 殺人鬼なら、それこそ手当たりしだいに……」

「白々しい。私は白々しい。」

「まあな。でも物語の中に登場する殺人鬼っていうのは、いきなり街中で包丁を振り回し、っていうのよりも、なんていうかそうだな、一定のルールを自らに課しその中で殺人を行うという、そんなパターンが多いな」

はい、それは私のことです！ なんて心の中で手を上げてみた。笑えるほど、先輩の言うことパターンとやたらに私は適合していた。

「いきなり包丁、だとまるで災害みたいだからな」

「じゃあ、もう一方は？」

「人間だよ」

なんでもないように、当たり前のように。そんな口調だった。人間って……。少し慌てながら私は言った。

「人間じゃないでしょ。殺人鬼でしょう」

「ルールにそって、そのルールを守る。実に人間らしいじゃないか。」

アスリートは一秒の記録を伸ばすために努力する。人はそんな彼ら

に感動する。己に課したルールの下に生きることを、人はかつていいと思うんだよ。殺人鬼にもそれは当てはまるんじゃないかな」

「……ふふ。せんぱいなんだか怖い考え方しますね？」

「なんだその不気味な笑みは？ まあ、いい。」

今のはあくまで物語のキャラクター論だ。あくまでな。

ところで。ここで私は一区切りを打つ。疑問に思っていたことを聞こう。

「どうして、私に口裂けジャックについて聞いてきたんですか？」

「え！ いや、それはだな、ええと」

島田先輩の顔から一気に汗が吹き出て、しどろもどろは最高潮。はっはっは。

先輩がなぜ聞いてきたか、その理由もだいたい察しはついていた。

「中畑先輩でしょう。あの怖いの苦手だから」

「い、いや違うぞ！ 違うったら！」

中畑先輩というのは同じ文芸部の人で、島田先輩のクラスメート。女子である。怖がりのあの人は島田先輩に相談したのだろう。そして島田先輩は……。

「ははは！」

「こ、こら笑うな淡墨！」

今はまだ、島田先輩がおせっかいだ、とでもいつておこうか。

——それ自体には、もう何の興味を抱かなかった。

豚、汚い豚。丸々と太った豚が、苦しそうに喘いでいる。首を押さえ、何が起きたのか分からない表情で、声にならない声をひゅーひゅーと鳴らしている。

でも、このおばさんとは話したこともない。ただ悪いことをした

というだけを私は知っている。そしてもうこの人は死ぬ。だからもう関係ない――。

あれ、と思った。

もっと罪悪感だとか、悪い人を倒したという満足感が得られると思っていたのに。

もう、この人に関することにはたいして、何も感じていなかった。空腹を満たしたら、食べ物に関心を抱かなくなるように。

私は、殺すという行為でもう、満足してしまっていた。

ああ、そうか。

私は正義感とかじゃなくて、ただこの人を殺したかっただけなんだ。

殺人鬼。私は人を殺すのが好きな殺人鬼だ。

そう理解して、そう理解した。その理解を受け入れた。

驚きもなく、ただそうなんだと自然に殺人鬼^{それ}を受け入れた。

なんという異常、でも私にとっては新しい趣味が出来たようにしか感じられなかったのだ。人殺しは悪いこと、けれど私は人を殺す。悪い人を殺す。ルールは課せられた。

ひゅう、という音を口からもらしておばさんは死んだ。月は優しく死体を照らす。

これから大変だな、と私は笑った。

――島田先輩。確かに目標を決めて邁進するのは人間らしいですけど。

殺人鬼ってやっぱりおかしい存在です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3378n/>

快笑鬼は笑う

2010年10月8日14時19分発行